



TITLE:

商業に関するマルクス説の一批判者

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 商業に関するマルクス説の一批判者. 経済論叢 1934, 39(5): 733-742

ISSUE DATE:

1934-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130513>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第五號

第三十九卷

昭和九年十一月一日發行

論叢

資本利子税に就きて……………法學博士 神戸正雄
經濟理論に於ける勢力の地位……………文學博士 高田保馬

時論

中小商工業の更生と組合運動……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

獨逸の本位制度……………經濟學士 島本 融
カルテル活動の分析……………經濟學士 田 杉 競
ヴィクセルの自然利子論……………經濟學士 青山秀夫

說苑

大阪の刷子工業に於ける經營形態の發達……………經濟學士 堀江保藏
配賦稅制度に於ける配分標準に就て……………經濟學士 佐伯玄洞
商業するマルクス說の一批判者……………經濟學士 松井 清

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

商業に關するマルクス説の

一 批判者

松 井 清

商業經濟學上に於ける問題を中心として、マルクス學說に批判を加へた稀有のものとして、ブリ氏の論文『アダム・スミス以來の國民經濟學理論に於ける商業の地位』がある。ブリ氏はスミス以來の經濟學諸體系に於て、商業が如何なる地位を占むるかを検討したる後、その最後の部分をマルクス商業理論の批判にあてゝゐる。マルクス經濟學が價值論を基礎とするその全體系に於て、英國正統學派の發展と見らるゝ如く、その商業に關する問題の提起もまた、全く正統學派流に、商業の生産性の問題を中心として展開されてゐる。しかも正統學派の經濟學が、彼れに於て一應の完成を見たと全く同様の意味に於て、商業の生産性に關する問

1) Jos. Burri. "Die Stellung des Handels in der nationalökonomischen Theorie seit Adam Smith." (Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. 1913. viertes Heft. S. 574-646)

題もまた、彼によつて一の徹底した見解にまで發展せしめられて居るやうである。従つてマルクス商業理論の批判は、單なる理論上のそれ以上に、我々の興味をそゝるものがある。

さて一つの基礎構造たる價值論の上に有機體として作り上げられたマルクスの學的體系に於て、一の見解を問題とする場合には、常に他の部分との密接なる聯關の下になされることが必要であり、殊にその方法論的基礎が考察の中心に置かれねばならぬと思はれる。然るにブリ氏はかゝる基礎的部分を、與へられたものとして前提して居り、その批判の方法は全構造的聯關に於てマルクス學説を問題とすることをせず、むしろ謂はゆる内在的批判に重點を置いてゐるが如くである。以下その所説を簡単に紹介しやう。

二

ブリ氏は先づマルクスの商業不生産説と商業必然説との矛盾に、默示的な疑問を投げかけてゐる。

マルクスの資本循環の表式はブリ氏によつて次の如

く示されて居る。 $G-W \xrightarrow{A} P \dots W'-G'$ 流通過程たる $G-W$ および $W'-G'$ は生産過程と嚴密に區別されねばならない。この二つの流通過程のうち後の $W'-G'$ は單に生産過程に於て生産された價值の實現を行ふに過ぎないものであり、流通過程は價值生産的でなくして價值の形態變化、價值の轉形を行ふのみである。價值および餘剩價值は、生産過程以外の部分にあつては、絶対に形成され得ない。『價值變化は、たゞ P なる轉形の下にのみ、生産過程の下にのみ生ずるのである。斯くして、生産過程なるものは、形式上だけの流通轉形に對立して資本の現實的轉形として現れることにならる。』従つて流通過程に於て機能する商業に依つては、何らの價值も生産されることなく、マルクスが彼れの價值論に於て主張する如く、單に等價のみが交換される。

かく價值も餘剩價值も形成されないに拘らず、流通過程即ち商品形態から、貨幣形態への商品價值の飛躍は、産業資本家にとつては異常に重要である。それは

- 2) Jos. Burri, a. a. O. S. 606. (この表式はマルクス自身のものとは多少異つてゐる。これはブリ氏の意識的に改變したものか、また如何なる理由から改變したものかは、明らかにされてゐない。)
- 3) Jos. Burri, a. a. O. S. 606.
(Karl Marx; Das Kapital BD. II. 邦譯、改造社版資本論第二卷27頁、)

マルクスによれば正に『命がけの飛躍』である。もし商業の行ふ處の商品形態から貨幣形態への價值形態の轉形機能が失敗すれば、商品は流通の流に於て停滯し、資本の再生産過程は中絶し、恐慌が襲來して、産業資本家の再生産過程は中絶されねばならない。

かくして商業は、一方には資本の再生産過程に必然的なものであるに拘らず、他方には不生産的なものであるとされて居る。この一見われ／＼の眼に矛盾であるが如く映ずる點に關しては、ブリ氏はたゞ之を指摘するに止め、次いで彼の積極的批判の對象として、マルクスの流通費用についての分析を取りあげる。

流通過程に於てもまた生産過程に於けると同様に、不變資本および可變資本を必要とし、之が爲めの費用として流通諸費用が支拂はれねばならない。かゝる費用は商品の價值に入り込まないであらうか。マルクスの流通不生産説に従へば、明らかに流通費用は商品の價值に入り込み得ない。マルクスは之を次の如くに説明して居る。『價值の狀態變化には時間と勞働力とを要

商業に關するマルクス説の一批判者

する。けれどもこれは、價值を作り出すためではなく、一の形態から他の形態への價值轉形を行ふため必要なことである。而してかゝる狀態變化の際に、雙方とも過剰の價值量を占有しようと努めることは、問題の上に何等の變化も與へない。この勞働は、雙方の惡意的な企圖によつて更らに甚しくなるが、それは一の訴訟手續についてなされる勞働が係争對象の價值量を増大することがないのと同様に、價值を造り出すものではないのである。⁵⁾『價值狀態變化の機能が、資本家に依つて一定數の賃銀勞働者に移讓された場合に於ても、問題は何ら變化しない。』彼れの勞働の内容は、價值および生産物のいづれをも造り出すものではない。彼れ自身が生産上の空費の一部なのである。⁶⁾この場合に勞働者が彼の資本家に對して捧げる餘剩勞働時間は、不生産的資本を減少せしむる助けと成る限りに於て、資本家に利益を與へるに過ぎないのである。かくの如く説明さるゝ流通上の諸費用を、マルクスは純粹の流通費用 (Reine Zirkulationskosten) と呼び、賣買期間、簿

4) Jos. Burri: a. a. O. S. 606.

5) Jos. Burri: a. a. O. S. 607

(Karl Marx: Das Kapital BD. II. 邦譯、前掲書第二卷98頁)

6) Jos. Burri: a. a. O. S. 607

(Karl Marx: Das Kapital BD. II. 邦譯、前掲書第二卷100頁)

記、貨幣の出費が之に屬せしめられてゐる。謂はゆる商業上の費用これである。然るに現實に於ける流通現象は、單に純粹の流通費用のみを含むものとして現はれるものでなく、そこには本質上異なる費用が、外見上流通費用であるかの如く現はれる。『此等の流通費用は、實をいふと流通部面に持續されるに過ぎざる、隨つて流通形態のため自己の生産的性質を隱蔽されるに過ぎざる、生産過程から生じ得るものである。』⁷⁾かかる費用の中に屬する保管上の諸費用および運輸上の諸費用は、少くともそれが社會的に必要なる限りに於て、假裝した處の生産費用であると云はねばならない。

右の如きマルクスによる流通費用の説明に對してブリ氏は純粹の流通上の諸費用と運輸上の諸費用との類似性もしくは同一性を論證して、『流通費用に關するマルクス理論構造の破れ口を見出した。』⁸⁾となしてゐる。ブリ氏に従つて運輸上の諸費用についてのマルクス説を検討しやう。『生産物の量は運輸によつて増大するものではない。また、運輸に依つて生産物の自然的性質

が變化を受けるやうなことがあるとしても、それは若干の場合を除く外、何等豫期的の利用效果ではなく、寧ろ不可避的の惡なのである。』⁹⁾此處に於ては物財の量が増加することもなく、その客觀的使用價值も變化しない。ブリ氏は、『マルクスの生産概念に従ふと、かかる場合には、價值および餘剩價值の形成は不可能となる。』¹⁰⁾となし、運輸業の生産性を論證せんとするマルクスの試みがその價值論に矛盾する點を突いて居る。更らにマルクスの云ふ處によれば、『然し乍ら、物財の使用價值は、物の消費に依つてのみ實現されるものであり、而して物の消費なるものは、位置の變化と、隨つて運輸業の追加的生產過程とを必要ならしめ得る。斯くして、運輸業に投ぜられた資本は、一部分的には運輸機關からの價值移轉により、一部分的にはまた、運輸労働を通しての價值追加によつて、輸送される處の生産物に價值を附加する。』¹¹⁾運輸業は生産が行はれる一工場内に於て、棉花が梳刷室から紡績室に移轉される場合に、その運搬が生産過程に入れられるのと同様なる意

7) Jos. Burri.: a. a. O. S. 607
(Karl Marx.: Das Kapital BD. II. 邦譯、前掲書第二卷105頁)

8) Jos. Burri.: a. a. O. S. 607.

9) Jos. Burri, a. a. O. S. 608
(Karl Marx.: Das Kapital BD. II. 邦譯、前掲書第二卷117頁)

10) Jos. Burri, a. a. O. S. 608

味に於て生産であり、たゞ運輸の場合には、完成生産物が完成商品として一の獨立した生産場所から空間的に隔つた他の生産場所に移轉され、前者の場合の現象が大規模に行はれるに過ぎないのである。

かくの如きマルクス説に對するブリ氏の批判は次の如くである。今もしマルクス説に従つて、商品の場處的移轉を行ふ勞働が生産的であるとすれば、何故に消費部面に於て使用價值を實現せしむるのに、場處的移轉と同様に必要な商品の人格的移轉を行ふ勞働が、不生産的であるのか。生産物が消費部面に入つた時に於て、初めて生産が完成されるのであるならば、流通は生産部面から消費部面への運動であるから、之を擔當する所の流通勞働は、正に流通勞働には非ずして生産的勞働であると云はねばならない。マルクスが流通部面に共に機能する商業と運輸業について、一方を不生産的であると云ひ、他方を生産的であると云ふのは、明らかに矛盾ではないか。兩者は何れも、自ら市場に出でず、また自ら交換することの出來ぬ商品を、生産

部面から消費部面へ移轉せしむる爲に、同様に必要ではないか。かく論じ來つて、ブリ氏は次の如く斷定する。『マルクスが純粹の流通費用として不生産性を主張する賣買勞働、簿記および貨幣の費用は、運輸および保管上の諸費用と全くの類似性を持つ。』¹²⁾生産費用と流通費用を本質的に區別すべき規範は一般に存しない。然るにも拘らず、之を區別せんとすれば、救ひ難き、Kasusistik に陥らねばならないであらう。マルクスは商業の不生産性を論證せんが爲め、生産過程は商品の客觀的使用價值が作り出された時に、すでに済し遂げられるものと云つて居るが、その生産概念を貫き通す事が出來ないのである。彼は之を保管業と運輸業の生産性の論證に於て破つて居る。其處に於ては何らの客觀的生産物も何らの商品も生産されないに拘らず、價值が生産されると説明されて居る。

三

以上に於けるブリ氏の批判は、資本がその再生産過程に於て通過する一段階たる流通過程の諸性質および

11) Jos. Burri, a. a. O. S. 608
(Karl Marx: Das Kapital BD. II. 邦譯、前掲書第二卷117頁)
12) Jos. Burri, a. a. O. S. 608

諸機能が専ら對象とされたのであるが、ブリ氏は更らに進んで、かゝる流通機能が一定の獨立せる資本家、即ち産業資本家と對立せしめられた意味での商業資本家に依つて行はれる場合に於ける商業資本についてのマルクス説の検討に入つて行く。問題は資本論の第二卷から第三卷の範圍に移る。

『社會の總資本について觀察すれば、その一部は不斷に相異るところの諸要素から成り、且つ絶えず大さを變じてゐるとはいへ、それでも常に商品として市場に存在し、貨幣に轉化せられんとして居る。また他の一部は、貨幣として市場に存在し、商品に轉化せられんとして居る。是等の資本部分は、絶えずこの推轉運動の中に、この形態上の轉化運動の中に在る。流通行程の内部にある資本の斯かる機能が、總じて特殊の一資本の特殊機能として獨立化され、分業に依つて或る特殊な種類の資本家たちに割り當てられた一機能として固定する限り、商品資本は商品取引資本または商業資本となる。』併し乍らかゝる流通資本の商業資本への獨

立化は、事態の本質に何らの變化も與へない。その生産性は少しも異るところ無く、商業資本は依然として不生産的である。商人の賣買 $G-W-G'$ なる過程は、産業資本家の販賣機能 $W-G'$ と本質上全く同一視すべきである。資本論第二卷に於てすでにマルクスは流通の不生産性を論證した。いま産業資本家によつて商品 W' が商業資本家に販賣せられた場合に於ても、商品は單に位置を變じたのみで、依然として、商品資本であり、商業資本家の手中にあつて販賣せられるのを待つて居る。商業資本が、價值を生じないのは明らかである。ブリ氏は産業資本がその再生産過程の一段階に於て採る處の商品資本の概念から、商業資本の獨立化を導き出すマルクスの論理的過程には矛盾なしとして之に贊成してゐる。^{*}

ブリ氏の批判の的となるのは、マルクスによる産業資本と商業資本の鋭い分離の仕方である。マルクスに依れば、近世經濟學はその最良の代表者に於てすら商業資本の特殊性を全く無視し、之を社會的分業によつ

13) Jos. Burri, a. a. O. S. 609
(Karl Marx: Das Kapital BD. III. 邦譯、前掲書第三卷229頁)
*) Jos. Burri, a. a. O. S. 610

て與へられた特殊の産業部門たる農業や製造業や運輸業と併立的關係に於て見て居るが、これほど脊理なことはあり得ないのであつて、商業は本質上諸産業と全く異なるものである。之に對してブリ氏は正反對の立場に立つて次の如く云つて居る。『近世經濟學は、生産活動と流通活動、生産費用と流通費用、生産資本と流通資本の單一性を強調することが餘りにも少な過ぎはしないか。』¹⁴⁾と。資本論第二卷に於けるマルクスの生産費用と流通費用の分離に反對したブリ氏は、同様に資本論第三卷に於けるマルクスの産業資本と商業資本の分離に反對して居る。二者の見解の對立を商業利潤の問題について觀察しやう。

商業資本は價值も餘剩價值も生産しないけれども、年平均利潤は諸他の産業資本と同様に生じなければならぬ。もし平均利潤を生ずることがないとすれば、資本は當然その部面から去り、商業資本はその存立の基礎を失ふからである。然らば商業上の利潤は如何にして生ずるか。マルクス説に従へば、商業資本自體に

商業に關するマルクス説の一批判者

よつては、價值も餘剩價值も形成されない。商品の客觀的な使用價值は、商業機能によつては少しも變化せず、價值形成的な勞働は、其處に於ては實現せられないのであつて、商人の買ふ時と賣る時に於て、商品は同一の價值を持たねばならない。それにも拘らず、商人が一定の費用即ち貨幣や簿記に必要な不變資本の費用、彼れの雇傭する勞働者の勞銀支拂の爲めに必要な可變資本の費用を要する事は、他の産業資本家と同様である。この費用を彼れは何所から支拂ふのであるか。彼れはこの費用を商品價格の中に代置する事は出來ない。何故ならばもしさうすれば、彼れは商品そのものの價值以上に販賣することゝ成り、マルクスの等價交換説が破れるからである。マルクスはこの難點を如何にして切りぬけて居るか。それは平均利潤の概念に依つてである。『商業資本なるものは、餘剩價值の生産に参加しないとは云へ、平均利潤への餘剩價值の均衡化には参加する。それ故に一般的利潤率といふ中には、餘剩價值の中から、商業資本に歸屬して行くところの

第三十九卷 七三九 第五號 一三七

部分、即ち産業資本の利潤からの一の控除部分が、豫め既に含まれて居る譯である。¹⁵⁾『マルクス經濟學に一般的社會的平均の考へ方が此處にも働いて居る。現實の社會に見られる商人の販賣價格が購買價格に超過する現象は、商品の含む價值および餘剩價值のうち、商人の手に歸すべき部分が豫め控除されて居た爲に生じたのであつて、商品は價值以上に賣られたのではなく、實は價值以下に買はれたのであつた。之に依つて商業利潤が何處から支拂はれるかは解決された事に成る。しかしかゝる解決を主張した爲に、マルクスの等價交換説が破壊されはしないか、この點にブリ氏は深い疑念をさしはさんで居る。價值以上に販賣されることゝ同様に、價值以下で購買されることも等價ではあり得ないからである。

價值不生産的な商業資本が商業上の利潤を生む爲めには、商業資本は一般的利潤率の構成に参加せねばならない。而してブリ氏の批判は商業資本は利潤率構成への参加の仕方にて、産業資本と本質的に殆んど異

る所が無いと云ふ點を論證せんとしてゐる。批判はマルクスの引例に従つて行はれてゐる。¹⁶⁾

一年間に前貸される産業資本の額を $720C + 180V \equiv 900$ とする。餘剩價值を $180m$ とすれば生産された商品資本の生産價格は $720C + 180V + 180m \equiv 1080$ と成り、平均利潤率は $\frac{180}{900} \equiv 20\%$ と成る。次にこの 900 の産業資本の外に 100 の商業資本が介入し、同様に自己の大きさに比例して利潤の配當に與ると假定しやう。商業資本は價值を生産しないから、 $180m$ なる價值は二者の間に分割されて、 162 と 18 に成る。『商業資本はそれが總資本の上に、幾許の大きさを占めるかに比例して、一般的利潤率の形成上に決定的に参加する』¹⁷⁾ からである。この場合、二〇パーセントだつた平均利潤率は $\frac{162}{900} = \frac{18}{100} \equiv 18\%$ となり、商業資本の介入によつて平均利潤率は低下したことになる。

産業資本家はこの場合に、何故にかくの如き利潤率の引下に甘んじなければならぬのか、理由は次の如くである。もし商業資本家が存在せぬと假定すれば、

- 15) Vgl. Burri, a. a. O. S. 611
(Karl Marx: Das Kapital BD. III. 邦譯、前掲書第三卷247頁)
16) Jos. Burri, a. a. O. S. 612.
17) Jos. Burri, a. a. O. S. 612.
(Karl Marx: Das Kapital BD. III 邦譯、前掲書第三卷246頁)

産業資本家は販賣機能を自ら擔當せねばならず、彼れが販賣機能を商人に移譲し、之に彼れの利潤の一部を分割した場合よりも、より多くの資本を流通部面に固定し、その結果として利潤率のより大なる低下を招くからである。『商業資本なるものは、直接には價值および餘剩價值のいづれをも造り出さない。それは流通期間を短縮せしめることに貢獻する限りに於いて、間接に産業資本家の生産した餘剩價值を増殖する助けと成り得る。それは市場の擴大を助け、諸資本間の分業を媒介し、以つて資本がより大きな規模で働くことを得せしめる限り、その機能によつて産業資本の生産性を促進する。』¹⁸⁾ブリ氏の批判の中心は、次の點に集中される。即ち『積極的に餘剩價值を生産すること、餘剩價值の減少を防止すること、の間に大なる區別をなすことは困難である。』¹⁹⁾マルクスは彼れが自ら樹立した産業資本と商業資本の鋭い區別を、他の部分に於いて破つて居るではないか。即ち價值の減少を防止する機能しか有せぬ保管上の諸事業を、彼は生産的な事業である

商業に關するマルクス説の一批判者

と云つて居るのである。

四

ブリ氏の批判は大體右の如くである。マルクスに依つて鋭く分離された生産費用と流通費用、産業資本と商業資本の概念は、ブリ氏に於ては何ら本質的相違の存せぬものと解された。マルクス理論に於ける内部的な形式論理上の矛盾を指摘することに依つて、内在的批判を試みたブリ氏は、マルクスが商業の不生産性を論證する論理的過程の力弱い點を或る程度まで明確に突いて居ると云へやう。殊に純粹の流通費用(商業費用と運輸業の費用の生産性に於ける相違についてのマルクス説の弱點は、彼に依つて徹底的に批判されて居り、この點はマルクス説のみならず、總ての商業不生産説が一般的に批判さるべき點であらう。然し乍らマルクス經濟學の基礎的な部分を與へられたものとして前提したブリ氏の批判は、その與へられたものとして前提された部分に關する解釋について、未だ論すべき問題を殘してはゐないだらうか。

18) Jos. Burri: a. a. O. S. 612
(Karl Marx: Das Kapital BD. III. 邦譯、前掲書第三卷24頁)

19) Jos. Burri, a. a. O. S. 612

即ち、

(一) 生産と商業との分離の概念を、歴史的、發展的考察から引離して、たゞ兩者の交錯せる資本主義的現實のみを考察の對象となすことにより、眞實に非ずとして否定し去るのは問題ではないか。

(二) 資本主義生産方法に必然的なものとして説明された商業必然説が、果して商業不生産説と矛盾するかどうかは問題ではないか。

(三) 社會的な抽象的な一の量としての價值概念を、素朴な物的客觀的價值概念と同一視するのは問題ではないか。

かくの如き諸問題は、直接に彼等の方法論上の對立にまで導かれねばならない。この點はブリ氏の積極的見解を見るに及んで益々明らかとなるであらう。しかし乍ら兩説を對立せしむることによつて一の結論を導き出すのは、私の今の意圖以外の問題である。茲ではたゞマルクス學説に關する一批判を紹介することによつて、商業不生産説の持つ諸性格を示し、且つ商業經

濟學において最も缺乏して居る基礎的な理論的問題の存在する方向を掴まんとしたに過ぎない。